

THE 3rd INTERNATIONAL STUDENT SEMINAR

第3回国際学生セミナー報告書

アジアの平和と開発

——日本を考える——

アジアの平和と開発 大学セミナーハウス代会国際学生セミナー-1973.12.00
報告書

'73

財団法人 大学セミナー・ハウス

INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

アジアの平和と開発

—— 日本を考える ——

第3回国際学生セミナー報告書

財団法人 大学セミナー・ハウス



— 目 次 —

第3回国際学生セミナー — その成果を顧みて —	大学セミナー・ハウス 専務理事 飯田 宗一郎	… (4)
主題の趣旨 「アジアの平和と開発—日本を考える—」		… (5)
共通セッション		
現代日本の政治と世論	明治大学助教授 渡辺 昭 夫	… (6)
アジアの新しい国際関係と日本外交	東京外国語大学助教授 中 嶋 嶺 雄	… (7)
70年代の世界、アジアにおける日本	成蹊大学教授 広 野 良 吉	… (9)
— 日本の経済的役割 —		
日本の都市と農村	京都大学助教授 米 山 俊 直	… (10)
日本とアジアの未来像	東京国立博物館 東洋考古室長 杉 山 二 郎	… (12)
ゲスト講演		
アジアのリージョナリズムと日本	朝日新聞論説委員 丸 山 静 雄	… (14)
アジア—日本の能力—	アジア財団日本代表 ジェイムス・L. スチュアート	… (15)
討 論		
セッション演習の報告		… (17)
感 想		
第3回国際学生セミナーの課題と成果	第3回国際学生セミナー 運営委員長 東 寿 太 郎	… (26)
セミナーに参加して	京都大学助教授 米 山 俊 直	… (28)
参加学生の感想		… (30)
参加者のアンケートより		… (34)
日程表、指導教授・運営委員名簿		… (38)
参加状況		… (39)
<付 録>		
The 3rd International Student Seminar		… (40)

第3回国際学生セミナー

——その成果を顧みて——

専務理事 飯 田 宗 一 郎

大学セミナー・ハウスは開館7年の歩みを経て、新たに「国際学生セミナー」の分野を開拓し、昭和47年3月にその第一回を開催して第一歩を踏み出したわけである。

わが国が年毎に経済成長し、アジアの中での存在が大きくなるにつれ、ようやく日本人の国際性が問題視されるに至ったこと、急激に変貌する世界についての基本的知識を習得する必要性が生じたこと、さらに日本に留学している外国人学生の受入れの未熟さから生ずる反日感情を改善する方途の一助たることが国際学生セミナーを企てるに至った要因である。

小さい規模であるが、国際経験の豊かな指導教授と問題意識を持った日本人学生と外国人学生が20数校の大学から集り、僅か3日間でも起居を共にしながら知的な生活を体験するということなどは、現在の日本の大学教育の中では未だ試みられなかったことである。このセミナーに参加された指導教授と学生達の感想に励まされて、我々は一層国際交流の場を日本の大学教育の中に広めることに努めたい。

発展途上国に対する経済援助についても単なる生活水準の向上ということばかりでなく夫々の民族が幸せに生きるための思想を生み出すことがアジアの平和と開発にとって最も必要なことであろう。いってみれば科学技術のもたらす近代的な暖房設備の暖さでなく、燃える薪の焰のような心の暖さの方が民族相互の友好を深めるのではあるまいか。

四季の移り変わりの美しい日本では夏は暑く、冬は寒いままに暮した方が自然なのであるまいか。熱帯に住む東南アジアの人々は日中の熱さをさけて昼寝をし、夕方涼しくなってから仕事をする方が合理的であるのかもしれない。冷房して熱帯の人々が日中働くことが必ずしも勤勉であるということにはなるまい。国際理解のためには多くの分野の学問を必要とするに違いない。

日本万国博覧会記念基金の援助によって、上記のような目的をもった、この国際学生セミナーを開催することができることを感謝したい。我々が次の世代を背負う人々を養成するということは、このような試みの中に彼等を迎え入れることではあるまいか。

主 題 の 主 旨

「アジアの平和と開発 —日本を考える—」

中国がほぼ全面的に国際社会に復帰し、長かったベトナム戦争も和平への希望をもたれるようになって、アジアは確実な平和と安定した発展への次の時代に入ろうとしている。そのアジアの一員である日本は、政治的経済的文化的貢献を強く期待されているが、はたしてその役割をになう資質と意欲をもっているであろうか。日本はその近代化の過程において、欧米の政治経済体制に範をとり、文化的には西欧文化の輸入と摂取につとめた。国際的には「追いつき追い越せ」を合言葉として、欧米先進国が構成する国際社会に適応することを第一次目標とした。しかし、西欧の文化は日本の歴史の中ではぐくまれた独特の社会構造にあつて未消化に終り、変質した特異の文化は、日本の真の国際化を妨げる結果となった。また地理的にはアジアに位置しながら、眼を西欧に向けて形成された日本の政治的文化的特性は、アジアの平和と発展に寄与することも不可能にしてきた。新しい状況におかれたアジアには、政治的経済的協力と積極的文化交流が必要であり、そのために日本の果たすべき役割があるとすれば、それは日本が日本自身を見つめなおすことから始められなければならないであろう。

国際学生セミナーは日本と外国の学生諸君の強い学問的関心と真剣な討議から、この主題について大きな収穫を得てきた。今回も熱心な参加者による3日間の共同生活と学問的人格の接触の中から、アジアの平和と開発の問題に深い相互理解が生まれることが期待される。



共通セッション

現代日本の政治と世論



アジアの平和と開発に関連して日本のもつ諸問題をいろいろな角度から考えてみようというこのセミナーの一環として、現代日本の政治をその世論とのかかわりという観点から見ようというのが、Aセッションの目的です。日本の動きが今後の世界やとくにアジアの国際関係にとって重要な意味をもつようになってきていることはいまさら言うまでもありません。その場合、直接には日本の対外行動や外交政策が問題となるわけでありましょうが、それらの問題はこのセミナーで別個に取り扱う場が用意されているようですので、このセッションでは日本の国際行動の背景をなすところの日本の政治の動きを理解することを主要なねらいとしていと考えてます。そのことは、国際社会において日本のもつ意味や役割を、いわば内側から深いところとらえることになるかと思います。

さて、現代の日本の政治は、それ自体をとって見てもはなはだ興味に富む主題であります。と申しますのは、つぎのような三つの理

明治大学助教授 渡辺 昭夫

由からです。すなわち、まず第一に今日、私たちは、一方では都市化、他方では過疎というかたちで現われているように、歴史上他に例を見ないほどの急速な社会的変動を経験しつつあります。ごく簡単なインデックスをとってこれを見ますと、たとえば我国の労働人口に占める第一次産業人口の比率が1950年の48%から1960年の33%へ、さらに1970年の19%へという具合に大変化が起っていることがわかります。ちなみに1950年の48%という数字は現在の韓国の数字にほぼ匹敵し、最近の19%はフランスとかイタリアとかの数字と非常に近い。おそらくこの傾向は今後も続くだろうと予想されます。こういう歴史上例もないほどのペースで社会変動が日本に起っているということが、一体日本の政治的構造にどういう影響を与えるのかということは、それ自体をとって見ても非常に興味のある問題であります。

第二は、今述べたような社会的変動が日本の政治構造に与えた影響が直接あらわれるのはどういう表現形式をとるかといいますと、やはり一般の日本人の政治行動や政治意識にあらわれる変化というかたちで具体的にあらわれてくると考えることができます。それは政治をささえるのはいわゆる国民であるという意味においてそうであるというばかりではなく、今日生じつつある変化というのは、いわゆる産業化社会からpost-industrial societyというものへの変化だと言えましょう。そしてこの後者の特徴は、別の言葉で言えば、

いわゆる情報化社会ということであると思います。それは人々の意識に働きかける種類の社会的行動のもつ重要性が飛躍的に増してくることを意味します。

第三は、以上に述べたことの結果として、政治というものをとらえる場合にも政治の表面で動く比較的かぎられた数の人々、つまり政治のプロといわれる人々の行動を見るだけでは十分でなく、その背後にある非常に多数の一般の国民の意識や行動に注目して、それらの人間のものの考え方を知り、また彼らの政治意識に影響を与えるメカニズムを追究することが非常に重要になってきています。つまり、政治というものが他の社会行動と非常に違いますのは、政治のプロとしての政治家の行動が中心となりますけれども、そればかりでは政治は成り立たないのであって、いわば素人としての一般の市民がその中に入ってくるところが政治の特殊でかつ面白い点であります。そういう意味で政治の玄人と素人との間で織りなす一つの相互関係が政治の特徴だと思いますが、その特徴がさきほどから申し上げていたようなことの結果として

ますます重要な問題として前面に出てくると思います。このことは政治現象をとらえる場合に従来のような方法だけではなく、大量的な、つまり量的な現象というものをとらえるための新しいアプローチが必要になってくることを意味していると思います。ですから、今まで申し上げてきたことは政治学の方法上のチャレンジをなしていると言えましょう。

このような理由から、セクション演習では白鳥令氏の近著「世論、選挙、政治」を用いて、世論というものをとらえるうえでの方法的な問題もさることながら、そういう方法にしたがっていかなる種類の問題が現在の日本の政治社会の中で生じつつあり、それが日本の将来にどういう意味をもつのかということと一緒に考えてみたいと思います。以上のことはアジア諸国の人々の国際的あるいは国内的生活に直接のかかわりはないかも知れませんが、はじめに述べましたように日本の対外的な行動というものをその深みにおいて理解するために、是非必要であり有効でもあると考えます。

アジアの新しい国際関係と日本外交

東京外国語大学助教授 中 嶋 嶺 雄



今日のアジアは、きわめて流動的な状況の

なかにある。そこで、このようなアジアの情勢との関連で日本外交のあるべき姿を考え、日本が今後どのようなかたちでアジアにかかわってゆくべきかについて検討してみたい。

今日、国際政治の多極化現象が目立ってきているが、このような国際情勢のなかで日本外交を考えてみても、国際政治の多極化に伴なった、多元的なオプションを考えるべき時期にきている。とくに昨年秋の日中国交回復以来、日本外交は、残っていた戦後外交上の懸案をそれなりに解決し、多極世界の現実

見合った外交を展開しつつあると見てとることもできようが、はたしてそれで日本外交は十分であるかどうかを考えてみると、まだまだそこには大きな問題がいくつか残されている。たとえば、今回の田中首相の日米首脳会談、ヨーロッパ諸国との首脳会談、ソ連首脳との会談にみられるように、最近では日本も首脳外交にのり出して行くかにもえる。しかし、私は米中対決の当事者であったニクソン大統領の北京訪問という、あのドラマチックな米中首脳会談を最後に国際政治における頂上外交のもつ大きな意味、つまり「イメージの政治」の効用はなくなりつつあるのではないかと思う。にもかかわらず、日本がもしもこれからそのような頂上外交をまねするのであれば、それは非常に滑稽なことになるであろう。

そこで頂上外交の派手なジェスチャーとはちがったもっと別の次元で今後の外交について考えてみると、今日のような国際化時代においては、外交官だけが外交を行なっているのではなく、政治家や財界人のみならずビジネスマンも商社員もあるいは経済技術協力のスタッフや学者たち、芸術家などによっても外交は行なわれていると考えねばならなくなりつつある。このような環境のなかで国際間のコミュニケーションを円滑にすすめるのがこれからの時代の大きな外交課題なのである。文化交流や知的交流を含めた広い意味での「情報外交」が重視されねばならないゆえんである。そして、今後の日本は多極化世界に対応しつつ日本が国際社会に対して貢献しうる限界と目標を明確にしてゆく必要があろう。このような外交を受けとめるアジア諸国について考えてみると、一口にアジアといってもそれぞれの地域、国家、民族によって非常に複雑な違いがあり、様々な問題を含んでいる。そもそも、アジアには、従来の国際政治学のスマートな概念ではとらえきれないような諸要因がうごめいており、ある意味ではプリミティブな、そしてまたローカルな現実のなか

でアジアは流動をつづけている。こうしたなかで当面の課題としてアジア諸国の国民形成と経済開発という重要な問題が一般的に存在するが、とくに国際関係の面からみると、中国とソ連の対立が、たんに国際共産主義内部だけの問題にとどまらず、中ソ双方の国家外交(State to State Diplomacy)の問題として、アジア諸国にかかわってきており、このことがアジアの流動化を促進しつつある。たとえばインド亜大陸の問題、とくにバングラディシュの成立経過を考えても中・ソ対立は非常に大きな影を落しており、さらに台湾の将来という問題を含めてこの中ソ関係が今後のアジアに大きな影響をおよぼすものと思われる。もう一つのアジアにおける個有な問題であるが、中国の影が今日のアジアをおおいつつあることである。中国の影といっても、第一に国際政治のうえで中国自身のプレステイジが増大してくることがもたらす陰影、第二にアジア社会内部にビルト・インされている華僑社会がもたらす陰影、第三には毛沢東型革命を志向する革命勢力がもたらす陰影があり、アジア諸国は、この三重の陰影さをもつ中国の影と必死になって格闘しているともいえるのである。ASEAN(東南アジア諸国連合)は「グアム・ドクトリン」以来のアメリカのアジアからの撤退がもたらす真空地帯化に対して、アジア諸国が中ソ対立の影響や中国の影と格闘するなかで、形成されたものだともみなすこともできるのである。このように複雑な現実を考えてみても、苦悩するアジアの現実をどのようにしてリアルにつかむかということは私たちにとってさしせまった重要な課題であると思う。最後に、現在の日中関係について考えてみると、急激に高まった中国ブームのなかで、今どんどんすすんでいる日中の友好ムードも、どうも双方に無理がありすぎ、一歩あやまれば、歴史のくり返しを呼びおこす危険を含んでいるものと思う。このようなことを含めて私は今回のセミナーではアジアの新しい国際環境と今後の日本外

交について、みなさんと一緒に考えてみたい と思う。

70年代の世界、アジアにおける日本

— 日本の経済的役割 —

成蹊大学教授 広野良吉



私は昭和47年に行なわれた第一、二回国際学生セミナーにおいて、日本の東南アジア諸国に対する経済援助について論じましたが、その場合、参加学生から日本の援助に対する批判が必ず出ました。又、最近のジェトロによる各国における対日イメージ調査によっても、日本の海外におけるイメージは非常に悪いようです。つまり日本の援助条件が悪いとか、日本の経済的侵略などという批判が出ています。これら批判の原因は何かと考えてみますと、次の三つの点であろうと良くいわれます。第一にまず日本の経済援助が諸外国の援助に比べて条件が悪い。第二に東南アジア諸国に進出している日本企業、経営者、技術者やその他日本人の行動が悪い。第三に日本の経済進出に対する現地民族資本を含めた外国資本の中傷によるものではないかと。

しかし、私はこの三つのどれをとっても日本の援助や経済活動が批判される根本的原因ではないと思います。そこで前述のような対日批判が対東南アジアにおいて出てくるのは基本的には日本の国内における経済体制のあり方、あるいは経済政策のあり方に問題があ

るのではないかと思います。そのうら返しとしてこのような批判が出てくるのではないのでしょうか。事実1960年代の日本の高度経済成長の過程において公害問題、住宅問題、社会資本の不足、あるいは資源問題など種々の経済的、社会的不均衡の諸問題が出てきました。日本はその経済援助において、さらに民間企業の海外進出において、自国の輸出入増進、重化学工業の発展に必要な原材料の確保、自国の高度経済成長に専念し、このような日本国内でみられる諸問題が現地でも現われてきたことに無頓着でいたわけです。それが対日批判の原因ではないかと思うのです。その意味で、戦後日本の高度経済成長のパターンをもう一度考え直す必要があります。

特に日本の対外経済活動は世界経済の大きな変化に照しあわせてみた場合に一体どういう付加的問題を伴ってきたかを考える必要があると思います。1960年代後半から1970年代に入って東西冷戦の緩和がみられたにも拘らず、南北間のギャップの拡大、国際通貨体制の不安などの種々の問題が起っていますし、アメリカ経済の相対的後退やEC、日本の経済的昂揚に伴う国際貿易のパターンの変化なども現われています。又、多国籍巨大企業による世界市場の分割などがあります。これら諸問題は今後も依然として進展して行くものと思われます。

そういう現実をふまえて、日本は従来の高度経済成長のパターンから生れた対外経済活動における諸々の大きな問題を解決するためには国内的に何をすべきかを考えなくてはならないと思います。我々は従来の高度経済成長

路線、生産第一主義を基本的に破棄し、国民福祉の増進のための経済政策に徹することができれば、日本の対外経済活動も自ら転換し、それに対する従来の批判を解決することができることになり、それを通じて、日本が本当の意味で、アジアの平和と開発に貢献することができるようになると思います。もう一度繰り返して言えば、従来の高度経済成長政策

と対外経済との関係を我々がはつきりと認識し、日本の対外経済活動に対する海外の批判は「日本人論」をどれだけくり返しても是正されないことを銘記し、その解消はまさに国内における高度経済成長主義を福祉路線に転換して初めて可能になることを知らなければなりません。

日本の都市と農村



都市と農村の問題、ことに日本の場合は特に過疎とか過密とか言われている問題を扱ってみたいと考えています。

毛沢東は、その革命戦略のなかで「農村が都市を包囲しなければならない」ということを述べているわけですが、現実の世界、ことに日本を考えてみますと日本は都市が農村を包囲しているという状況になっているのではないかと思います。

ここでは都郊問題 rural urban problems と呼ばれている問題について、日本を一つのモデルにして取扱いながら、できれば世界全体でどうなっているかということまで問題をふくらませてみたい。

最初に述べたように農村が都市を包囲しなければならないというテーゼがあるにもかか

京都大学助教授 米 山 俊 直

わらず、実際には都市が農村を包囲していると申ししたのはurbanization と呼ばれている現象のことを言いたかったからです。これは少し乱暴な類推になるかもしれませんが、問題を拡大して考えますと、いわゆる南北問題というの言わば、都市が農村を包囲している、ということになるのではないかと考えます。つまり都市的な世界、都市的な思考様式、都市的な行動のパターンというものが北の国々で幅をきかせて、それが南の、いわゆる発展途上国の人々にもかなり大きな影響を与えているわけですが、そのかなりの部分が、もしそういう比喻を許されるならば「都市が農村を包囲している」という形になっているのではないかと私は思います。

例えば私のセクションにおいて現実世界に世界の各地を見てきた学生の報告など聞いたのですが、例えばバンコックやカトマンズにおいて矢張り人口の集中という現象が起っている。これはナショナルレベルでの話ですが、これは逆にいいますと農村、あるいは、カントリースイドのさまざまな変貌を促すでしょうし、場合によっては日本に典型的にみられるような農村地域の荒廃ということが予想され、そういう危険があるのではないかと私は思うわけです。

一つだけ荒廃の具体的な例を申し上げますと、つい最近私が見てまいりました奈良県の十津川村という所です。ここは農村というよりも何代も前から植林されてきた木を切出して、それを売って生活している典型的な山村です。実際には山林地主は少数で、大部分の村人は山林労働者ということで、きこりで生計を立てているわけですが、今十津川は大きな問題に直面している。それはこの村の人口は明治から最近までは12,000人くらいのレベルで安定してきたのですが、1960年代に急速にそれが減少して8,000人を割ったという事実です。その誘因はいろいろ考えられますが、外部に就業機会を求めて出ていっている。この村では、日本の大規模プロジェクトの先駆的なものの一つである「紀の川・吉野川総合開発計画」に沿って戦後ダム建設が進められており、これを人口のカーブで見ると12,000人くらいで続いていたものがダム建設の時期は16,000人くらいに増え、工事後、しばらくして急に減少している。それは工事のために人口が一時的に増えたのであり、ダムの完成後工事の人たちが村を出ていくのに続いて村の人たちも出て行ってしまったからです。

私がもう一つ気になったのは、谷間にダムが点在してそこにプラスチックの大きなゴミや流木とかその他のゴミが浮いており、ダムの水面がほとんどおおいづかされている。また国道168号線が通っており、そのガードレールの破損率が50パーセント以上である。それはダンプカーが近畿地方で二つよりない砂利採取をこの村の川原でやっており、1時間に相当数のダンプが通るからです。そういう状態のなかで人は今までの伝統的な生活様

式は殆んど失われ、村の機能が完全にバラライズしてしまい、放り出された感じの老人、子供だけという状態になっている。しかもこの十津川村というのは北海道を除いた地方では最大の村と言われ非常に大きな地域を占めておりますが、我々の国税をこの村へ還元する金額、つまり地方交付税は1人当たり400万といわれていますが、それでも生活環境は非常に悪いし、しかも都市的なものはふんだんに入っているのですが、そのために悪循環で一種の貧困にあえいでいる。私は十津川村へ行きその現状を見まして十津川だけを考えるわけにはゆかなくなりました。例えば東南アジアの各地に計画されているプロジェクト、それはそれでその国の経済の発展に役立つようにという大きい名分があるでしょうし、事実そういう側面もあるに違いない。しかし、そういうプロセスにおいて、弱者の立場に立たされている人たちは非常に困難な状態に追いつめられている。その人たちは自分で防衛して自分自身の生活を考えていかなければならない。しかも国費は投入されても貧困は続いている。それではこういう問題はどのように解決すればいいのかと思うわけです。その解決方法というものが一つなり二つなりみつければそれを一つのモデルにして、東南アジアあるいはこれから様々なところで起るであろう一明るい側面の陰で昔からの生活を破壊されていく人たちの存在を考えていくことができる。あるいはその人たちをどうすればよいか、ひいては、「都市が農村を包囲している」状態が果たしてこれでいいのかどうか、南に対して北が圧倒的な経済力、軍事力での横暴を防ぐことができるというモデルにするキッカケができると思うわけです。

日本とアジアの未来像

東京国立博物館東洋考古室長 杉山二郎



私のかかげたテーマは直接「アジアの平和と開発」にどの程度具体的に寄与するか、はなはだ難しいのですが、私はたまたま東南アジアから西アジアにかけて発掘その他、調査に参加しまして種々なことを考えております。その中で常に私は「日本を考える」という命題だけは片時も忘れたことはありません。現状では日本というようなもの（すなわち、歴史、文化、美術、社会、宗教、風俗一般にいたるまで、その因果関係、成立展開の事情など）を若い人だけでなく、日本人全体が知らなさすぎると思います。例えば、外国に行って外国人から日本のことについて種々聞かれた場合、正しいレポートができるという人は非常に少ない。これは一つは日本の宿命であると言えましょう。日本が縄文期以来周辺の高文化にあこがれ、それを摂取消化するため努力するかたわら、しかもそれに追いつけ、追い越せというスタイルを身に付けて、今日までできてしまった結果であると考えます。自分の国のことを考えるよりも、或るあこがれる対象ないしは軽蔑する対象を見つけてはひたむきにその方向に走っているという現象が見られますが、それは、立ち止って自分の姿

を反省してみる、それまでの落着の量と質とを吟味して、これから歩むべき自分の道を自分で発見し、その途を創りだしてゆくスタイルが遂に今までのところ生れなかったといつてよいのであります。

私は、古代の考古遺品とか美術品というものを対象しております。けれども私が常に感ずることは学問ないし芸術など文化現象というものは、それまで存在した権威ないし保守的なものにとつて、大変危険なものであるはずなのですが、学問や芸術を国家が保護する、ないしはそれらが保護に甘んずるというのは大変滑稽であるということです。学問や芸術にたづさわる人々がそうした考え方の上で、取り扱わなくてはならない。もつとも学問と芸術は現体制に対して批判的であらねばならないし、またそういうものの上に新しいものが創造されてきました。これはヨーロッパの古代から現代に至る種々な人を引合いに出すまでもなく、また日本の種々な先輩達の中でそういう人達の沢山いたことを私は知っております。けれども一般の人々はそういうことを余りに知らないのではないかという恐れをもたいただいております。

私は「日本を考える」という場合、常に対等の視点を如何にして獲得するかということを描描しておりますが、今まで対外的視点のとり方として、あこがれるか軽蔑するか、つまり上を向くか、下を向くかというスタイルをとつてきており、今でもそういうスタイルを無意識の中にとっていることは沢山あります。例えば、「東南アジアを我々の手で……」とかいうことは、かつての大東亜共栄圏のイメージーションを持つて企業が進出したり

また「我々が学術を教えてやる」というようなことがらがそうですが、そのような考えでアジアに行った場合大変恥をかくことになりましょう。それら、周辺の国々の文化、歴史、社会、経済、風俗、宗教一般について充分同情と理解を持って自由に対等に接触しなければなりませんし、その対応はそれらの国々の言語を尊重することに始まります。その国の国語を粗末にする人間が相手を充分尊敬できるはずがないのであります。問題をそういう観点にかえてみるならば、我々が東南アジアとか世界を知ると同時に日本をその投影としてはつきり把握しなけばいけない。我々は戦後、一般の文化というものを軽視するように教えられてきました。中国のようにある指導者が5億や6億の民を引張って行く時には国字の簡略は必要でしょうが、我国のように90%以上が初等教育を受け、またかなりの高等教育を受けつつある人間が、あい

まいな仮名遣いと制限漢字などということでは自分の国の文化を理解するためのもっとも基本的な道具を失いつつある。こんなことがあっていいのでしょうか。私は日本を本当に考えるためには、漢文を正確に読め、万葉以来の古典を楽しみながら読むことのできる、そういう人間が必要であると考えます。多少の外国語が読めたり喋れたりすることよりも、日本の文化、芸術の精華を正しく理解し、楽しく観照できるスタイルを獲得しなくてはなりませんまい。その上に立つて、ギリシア、ラテンの古典から人間、ユマニテ源泉の美果香酒を掬すべきであり、そして始めて周辺の人々と対等な視点をもてる日本人像ができあがると考えております。かくして、日本はどうなるかということからはじまりアジアに及ぼすべきである。我々はアジアを一つにしたいのではなく、一つになるように我々の方から努力をすべきであると思います。



ゲ ス ト 講 演

アジアのリージョナリズムと日本

朝日新聞論説委員 丸 山 静 雄



アジアの平和と開発を通じて日本を考えるには、アジアの側に、日本の側に、それぞれ取り組まなければならない問題が多数あるが、ここではアジアのリージョナリズムを通じて、この問題を考えてみることにした。

リージョナリズム (Regionalism) は一般に地域主義と訳される。地域主義というと、ともすればコミューナリズム (Communalism) と混同されやすいが、両者は大きく違う。

コミューナリズムは自己の所属する地域や、同一の種族、言語、宗教、カーストから成る社会 (Community) の優位性を主張する考え方で、インドにおけるヒンズー教徒の集団とイスラム教徒の集団との間の対立と緊張の関係についていわれることの多い言葉である。

リージョナリズムはまた一国内における特定地域の開発に関連して使われることがある。たとえば地域学 (Regional Science)、地域開発という場合である。地域学とは経済学、社会学、地理学、行政学、土木工学、都市工学などを包摂して地域問題にアプローチしよう

とする新しい学問のようなのだが、ここにいうリージョナリズムは、それともまた違う。

ここでとりあげるリージョナリズムは特定地域に位置する諸国家間の経済、技術、文化面における協力をさす。ナショナリズムを根とし、さらに高揚されてインタナショナルイズム (国際協調主義) に発展するものである。戦後、後進地域に生まれた地域協力をいい、したがって軍事的な協力は含まれない。

アジアにおける地域協力機構には次のようなものがある。

- ①エカフエ (E C A F E。国連アジア極東経済委員会)。
- ②コロンボ・プラン。
- ③東南アジア開発閣僚会議。
- ④東南アジア農業開発会議。
- ⑤アジア開発銀行。
- ⑥東南アジア諸国連合 (A S E A N)。
- ⑦アジア太平洋協議会 (A S P A C)。
- ⑧アジア生産性機構 (A P O)。
- ⑨R C D (Regional Cooperation for Development。パキスタン、イラン、トルコ三国間の協力機構)。
- ⑩非同盟協力機構 (インド、エジプト、ユーゴ三国間の協力機構)。
- ⑪国連専門機関によるもの (I L O、F A O、W H O、U N E S C O)。
- ⑫国際機構によるもの (I C A)。
- ⑬アジア放送連合 (A B U)。

そこで次の三つの視点からアジアのリージョナリズムをとりあげてみたい。

1、リージョナリズムは後進地域 (中南米、東欧、中東、アフリカ、アジア) のうちアジアでの抬頭がいちばん遅れ、それだけアジアでは新しい考え方であること。

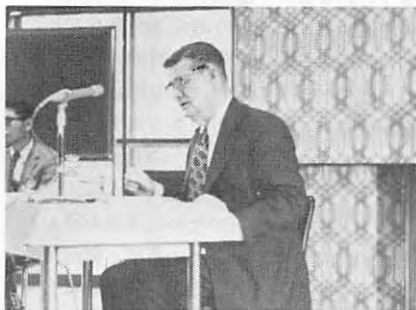
2、アジアの平和と開発にとってリージョ

ナリズムは大事な条件であってアジア自身がかもって真剣に努力すべきものだと考えられること。

3、日本がアジアにアプローチする場合、リージョナリズムの流れにそうのが効果的だと考えられること。

アジア—日本の能力—

アジア財団日本代表 ジェイムス・L・スチュアート



私の学生時代、世界の国々を比較する場合、天然資源の豊富さの度合と国土の大小という二つの概念が用いられました。しかし、私は両方とも間違っていると思います。特に日本については、この考え方が如何に間違っているか良くわかると思います。現在では国力の豊かさというものを考える基準として、私は、知識、能力を十分に活用できる人材の豊かさに着眼したい。何故かと言いますと如何に多くの資源を持っている国にしても、それを活用できる人材が不足していれば何の意味もなさないからです。

次に国土の大きさの問題にしても日本は決して大きな国ではありません。しかし、歴史的にみても、イギリス、オランダ、ドイツなどヨーロッパの先進国と言われている国々は日本とほぼ同じ大きさです。日本がいまだに他の先進国と比べて小さな国であると思われていることは、まだ日本人が日本という国は小さな国であると思っていることに問題があるのではないのでしょうか。

さて、ここで日本のアジアにおける能力を南北問題における日本と他のアジア諸国との経済力のギャップの関係で考える時に、私はもって常識的な意味において、この開きの大きさ、重要性を認識して欲しいと考えます。

過去の日本とアジアの関係を考えてみますと、台湾、朝鮮、満洲などを日本が属国とするなど、あまり良かったとは言えません。従って実際に意味のある日本とアジアの効果的な関係は今から創り出されていくのではないかと思います。

もう一つ付け加えて言えば、19世紀の日本には、日本とアジアの関係について福沢諭吉による脱アジア的な思想と岡倉天心による汎アジアの思想の二つがありました。このような考え方は今の日本人にも十分見ることができですが、現在の日本人はもってアジアに目を向ける必要があると思います。これは新聞などのマスコミが日本とアジアの交流について余り多く報道しないということにも問題がありましょうし、また日本とアジアの文化交流団体の仕事を知らない日本人が非常に多いことにも原因があると思います。

これは私がアメリカ人であるという点も考慮して聞いて欲しいのですが、今の日本に対するアジアのイメージを考えてみると、第一にアジアの国々によって日本に対する考え方が異なっており、その上、このような考え方は日々変化しているということです。例えば昨年バンコックでは学生の間で排日運動が盛んでしたが、その時期にインドネシアやシン

ガポールではそのようなことは見られませんでしたが。しかし一年後の現在では逆にシンガポールでは対日批判の感情が高まっていく傾向が見られ、バンコックではそれほどではありません。フィリピンでも10年前と現在では違います。大体においてアジアの国々は日本に対して良い感情を持っているのではないかと私は思っています。

アジアの国々の日本に対する期待という面についてみると、アジアのアメリカに対する期待と同じく、彼らの期待はいつも日本の行為を上回っていると思います。今、ここで重要なことは期待の対象がアメリカから日本へ徐々に変わりつつあるということであり、これも経済的ギャップの差によって起こることであり、先進国と後進国との関係においては避けられないことです。日本の観光客の取り扱い方にしても確かに一部においては不評を買う点もあります。現地人は観光客の落すマネーを期待しており、日本の新聞が報道するほどに彼らは悪く思っていないのではないかと私は思います。特に今、私の言いたいことは、東南アジアの大学教授をはじめ学生達は、日本の商社マンではなく、日本の大学教授や学生達と同じレベルの問題について話し合うことを強く望んでいるということです。

アジアの学生や若者達の日本や欧米諸国についての考え方を見てみると、彼らは自分達の政府や社会に対する不満が大きく影響しています。総じて東南・西南アジアの人々は日本に対して友好的な考えを持っています。特に注意する必要があるとすれば、日本と北京の関係に伴い華僑の問題が存在するために、日本とシンガポールの関係が今後少し悪くなるかも知れないということでもあります。このことは、大国同士が関係を結ぶ時には、小国の立場もよく考えに入れておく必要があるということでもあります。

ここで、今のアジアに対する日本の考え方や態度がどのようなものであるかについて少

し述べてみたいと思います。それは今の日本は東南・西南アジアに対して次の四つの理由から関心が薄いということについてです。第一にこの1年間日本の関心は中国へ向けられていたこと。第二に今でも韓国人の日本人に対する感情は余り良くないので日本人は敬遠する傾向があること。第三に日本のインテリや政治家のなかに、日本は今や工業大国になったので、今後の世界の動向を左右する勢力になりきれんという意見があり、まずはその方の地固めをするという考え方があること。第四に一般の日本人は中国、朝鮮半島、台湾以外の他のアジアの国々に余り関心を寄せる機会が少ないこと、などであります。

同じく日本の進歩派の人々の考えにふれてみますと、彼らは、第一にアジア人は圧政に苦しめられ生活の向上のために革命を望んでいる、第二に日本がアジアの諸国と経済援助や文化交流を深めることは、結局これはアメリカの肩代りに過ぎないなどのことが指摘できます。しかし、私の考える限りでは、アジアの人々は政府の圧迫に対する反感はあるにせよ、革命や戦争なしに、改革による生活の向上を望んでいると思います。これを理解するには、若い諸君が現地へ行き、自分の目で見て考えることが最も大切だと思います。

経済援助についてみると、アジアの人々はアジアにおいて、日本が指導的立場に立つことを強く望んでいる反面、日本の独走など行き過ぎを恐れていることも事実です。現実には、日本の企業はアジア諸国との関係において、今後、東京を中心とするビジネスだけにとどまらず、現地では現地人の人材を活用し、そして現地人幹部を育成し、彼らのビジネスを行なう方向にもっていくべきでしょう。

最後に私が述べたいことは、アジアに対して日本はもっと知識としてアジアを知ることであり、態度としては人情を持って接すること、もっと勇気を持つことであると思います。そして、もっと思いやりを持って今後のアジア関係を伸ばして欲しいと思います。

討 議

セクション演習の報告

セミナーの最終日には、各セクションからの報告があり、それにもとづいて全体討議が行われた。下記の報告は、その後各セクションの学生代表により作成されたものである。前掲の指導教授による共通セッションとあわせてお読みになれば、セミナーの全体像を把握していただけると思う。

A セクション



指導：渡辺昭夫先生

日本の対外政策・対外行動は、すべて国内政治というフィルターを通じてなされている。「アジアの平和と開発」のために日本がいかに行動すべきかを考えるにあたって、日本の国内の政治動向、国民の政治意識は重要な要因となっている。

日本の対外政策形成過程を明らかにするには、日本の政党制度や自民党の政策決定過程の性質をはじめとする諸条件を考慮に入れなければならないのであるが、その中で特に、世論と政治意識について議論を進めた。

対外政策の形成における世論の役割を考える前に、世論概念の混乱をさけるために、D・C・ヘルマンに従い「世論の風潮」と「意

識の世論」という二つの世論を考えた。

前者は、「一般国民によって抱かれている概括的な態度」であり、後者は、「マス・コミュニケーションを含む特定の個人や団体によって表明される政策に関する積極的かつ明確な意見」である。

すべての民主主義国家においてと同じく日本でも、一般国民は対外政策について一時的に関心を抱くだけで、直接に影響力を及ぼしえないのがたいていの場合であった。

多くの国民は、対外政策に関して知識をほとんどもっていないし、関心も抱いていないということが世論調査によって明らかにされている。

しかし、世論は現実には政治を動かす力として重要な地位を占めている。

対外政策は、つぎの二つの意味で「世論の風潮」による影響を受ける。

第一に、政策決定者は、自分たちの所属する社会的政治的環境の不可欠な部分となっているような態度に本能的に従うものである。

具体的には、日本人がアジア人に対して潜在的に優越感を持っており、欧米人に対して劣等感を持っていることが、政府に対欧米追随の対外政策をとらせる基盤となっているということである。

こゝで留学生の方から、昭和四十八年九月

の朝日新聞の世論調査で「これからどの国と仲よくしたらよいか」という質問に対して、中国を除くアジア諸国全部でわずか数パーセントという指摘があり、改めて私たち日本人の対アジア観を考え直させられた。

相手国に対するイメージが対外政策決定に大きな影響を与えるという事実を深く認識し、私たちは、まずアジアに対する偏見を取り除くことをしなければならない。

第二に、政策決定者は、世論調査、選挙結果、対外政策をめぐる論議などにあらわれた一般的世論に影響をうける。

日本には、平和主義という大衆的感情（ムード）が戦後あらゆる階層に拡がっていたが、ニクソン・ショック以来「反米」ムードが高まり、さらに「ナショナリズム」的ムードのきざしも見られる。

このような「世論の風潮」は、日本の対外策に対して影響を及ぼすのであろう。

次に「意識的世論」を形成する日本のマス・メディアの現状を検討した。

マス・メディアは、政策決定者たちと一般国民をつなぐ主要なコミュニケーション・チャンネルである。

マス・メディアは、個々の問題の取り扱い方しだいで、それに関する一般国民の反応のあり方に影響を与えることができる。

関心の焦点を定めることによつてマス・メディアは、国民の政策決定過程への参加の仕方を間接的に決定する。

現代日本を「情報社会」といわしめている三条件は、「知識と情報の激の飛躍的増大」、「コミュニケーションの拡大」、「情報処理能力の増大」である。

ここで特に問題となるのは「情報処理能力の増大」である。

これは、大規模に組織された機構と大掛りな装置をもつてはじめて可能になる。

それゆえ、既存の社会に既得利益を持つ大組織が情報を独占し、コントロールをするという危険性をはらんでいる。

また、政府の批判に必要な情報は、膨大な官僚機構を持つ政府がすべて握っている。

沖縄返還交渉の経過で明らかになったように、主権者である国民は、どのような対外交渉が行われたかの情報を与えられていない。

政府の情報独占は、国民の正当な「知る権利」を犯すものである。

本来政府の情報独占に対抗すべきマス・メディアは、複雑な自己規制のメカニズムによつて選択した情報を国民に送っている。日本の政治過程で重要な地位を占めているマス・メディアは、多元的な情報を国民に提供すべきである。政党とのパイプが細い日本において、国民が政策決定へ参加しようとする際、マス・メディアは大きな役割を果たすべきである。

以上の他に「日本の政治と世論」をめぐるさまざまな議論がなされたが、私たちは今回のセミナーにおいて提起された問題をさらに追求し、日本の平和とアジアの平和が相互に依存しているものであり、相互の絶対必要条件であることを認識して、アジアの一員として日本が「アジアの平和と開発」のためにいかに行動すべきかを考えなければならない。

（大原洋司・慶応義塾大学）

B セクション



指導：中嶋雄先生

Bセクションは、幸いアフガニスタン・オーストラリア・フィリピンからの留学生の参加を得ることができた。

そこで第一日目の討論は、各留学生に、主として、彼等の母国並びに、母国と日本との関係について自由に発言してもらい、質疑応答を行った。彼等からは、オーストラリアは、アジアの一員としてアジアに参加できるか？日本は大国の仲間入りをする以外に、なすべきことがあるのではないかと、日中接近を「東京－北京枢軸」の形成として受けとめる複雑な東南アジア諸国の反応をどう考えるか？コミュニケーション・ギャップは、日本と東南アジア諸国との場合、日本側に大きな責任があるのではないかと等の問題提起があった。

特にコミュニケーション・ギャップについては、フィリピンを例にしたが、フィリピンが日本の第四位の貿易相手国であることを知っている日本人が何人いるのかを考えた時、日本人の意識の欠落ぶりは明白であった。

一体、我々は、心中に、どんな世界地図を描いているのか、反省させられた。一方、日本側参加者からは、ムードが先行する日本の日中友好に対する取り組み方の危険性・日中友好と裏腹に切り捨てられた台湾措置の問題・復活しつつあるかに見えるアジア主義への警告・現在の日本と東南アジア諸国との経済的政治的コミットメントは、米国と南アメリカ諸国とのそれに比定して考えられるのではないかと指摘・問題の多い日本の経済協力は国内問題の反映として捉えられるかどうかという疑問の提出等があった。

第二日目は、討論に先立ち、中嶋先生に新しい国際関係の中で日本を考える場合の問題点を述べていただいた。先生は、①国際政治におけるイメージと実体とにずれが存在すること。（アジアの冷戦構造、朝鮮戦争の例では、一般的なイメージとは異なり、当時一枚岩と考えられてきた中ソの間に、不和が存じていたという事実がある。）しかも、国際政治は、いわば、この虚であるところのイメージで動いてきたのである。我々としては、できるだけ実体に近づき、正しい判断をなすことが肝要であること。

②米中接近により、米国が現状維持勢力に転じた後、ブレジネフ・ドクトリンを持つソ連と共に、経済面で、アジアにおける現状打破勢力になった日本の孕む危険。この危険は、世界の問題児として袋だたきにあいかねない存在であることを自覚していない日本人、更に、期待を裏切られると、いつべんに反撥に転じる日本人総体の性格を考え合せるなら、一層大きくなるということ、以上を指摘された。又質問に答えて、新しいアジアの国際関係において、「中国の影」が圧倒的な影響力を持っていることを明らかにされた。

最終討論は、個人によりニュアンスはあったが、参加者の「日本外交をとらえ直そう」という問題意識に支えられて、外交理念そのものの検討から入った。そして、日本が国家目標を持たず、外交原理を欠落したまま、従って外交的には「事勿れ主義」で、経済大国化を進めてきたことの分析と批判がなされ、国家目標を持たず、近視眼的に経済繁栄第一主義を把持することの危険を確認した。ところで、中には、経済大国化は不可避であった、又、経済的繁栄が国民一人一人の幸福に結びついていない等の意見があったが、概して、日本人学生は、日本が経済大国としてひとり富んできたことの後めたさを表明する者が多かった。これに対し、留学生が、日本の繁栄による弊害は、ただ日本の責任にのみ帰せられるのではなく、相手諸国にも責任があること、つまり、作用・反作用である事を指摘したのは印象的であった。経済大国であることを原罪として否定するのみで終るのではなく、既に日本が経済大国として、複雑な国際関係に組み込まれている以上、我々には、その事実を事実として認め、その上で、いかなるマイナス面があるか直視し、それをチェックしていく積極的な姿勢が必要である事を痛感させられた。

これらの議論をふまえて、日本は、国家の安全・平和共存を国家の目標にして現実化し、又、経済協力においても、内外不干渉の原則

を貰いて、リージョナリズムの適切な発展に寄与し、発展途上国との較差をなくす方向で努力すべきであるとの意見が出された。その他、外交を政治的・経済的なものとのみ限定しないで、もっと文化的な交流・相手国の教育水準向上等の面に力を注ぐべきではないかという注目すべき発言があった。このことは、最後に中嶋先生が、本格的な国際化時代を迎えて、今まで無視されてきた文化外交・情報外交の公的・及び民間レベルでの推進に、地道な努力を払うことが重要であるとして、まとめられた。

(池内 功・東京教育大学)

C セクション



指導：広野良吉先生

アジアの平和と開発—日本の経済的役割—に関して2日間の討論を終え、真の経済協力とは何か、又、その経済協力に応じて日本の産業政策、経済体制は如何にあるべきかが焦点となったのである。当セクションは参加者が極めて多く(23名)、多種多様な意見が出たので私自身でその内容を集約してみた。こうする事に依り、当セクションの共通意見は何か、又、上記のテーマを解決する方法は何かを解明できよう。さらに、広野先生の有意義なコメントに基づき私見も最後に加えてみる事にした。

(1) 参加者の意見の要約

— 経済協力の意義について —

- | | |
|----------------------------|----|
| 1 日本と開発途上国の相互理解に基づくもの | 5名 |
| 2 日本国内の産業、貿易政策の調整 | 4名 |
| 3 アジアの発展による相互利益と政府援助増加の必要性 | 3名 |
| 4 開発途上国の国家主権の尊重に依る協力 | 3名 |
| 5 開発途上国の人口抑制 | 2名 |
| 6 国際協調機関の必要性 | 2名 |
| 7 経済協力を通じた開発途上国の自助努力 | 1名 |
| 8 技術協力 | 1名 |
| 9 援助効果 | 1名 |
| 10 文化交流 | 1名 |

この表から上位4項目で全体の65%を占めているのでこれらを中心に説明していきたい。

第1に“相互理解”が経済協力の意義を持っている点である。供与国は経済協力が被供与国の何に役立つかを正しく認識する必要がある。つまり、相手が何を(資本・技術・商品)、どの分野に(農業・工業・公共部門)どれだけ、どの方法で(タイド・アンタイド)必要なかを先進国はさまざまな角度から研究する必要がある、その為には常に相手の立場に立ち、その国の文化や習慣を知らなければならない。しかし、ジェイムス・L・ヌチユアート氏の講演にもあった様に、相互理解を一步超えて“相互努力”を行う事は重要である。例えば、民間投資の在り方に関しては先進国が投資する部門と、それを受ける開発途上国が期待する部門に“gap”があり、これを解決する方法として、開発途上国の人々も先進国をよく知り、相互理解・努力する事によってこの gap を埋めていく事が望ましい。

第2に、日本と他のアジア諸国とは相互依存の関係にある。例えば、日本の資本・技術

豊富国だが資源に乏しい一方、他のアジア諸国は前者は不足しているものの後者は豊富である。従って、日本もアジアの発展なくしては発展はありえないのである。これに関しては本年4月に行われた第29回 エカフェ総会における大平外務大臣演説でも言われている。

「議長、……わが国はこれまでアジアの繁栄と発展のために出来るかぎりの協力を行ってきました。これは一つにはかかる協力が同じアジアの先進国としてのわが国の責務であると考えからであります。又、一つにはアジアの繁栄と発展なくしてわが国の繁栄も発展もありえないと考えるからであります。……」。従ってアジアの発展の為に、日本の経済協力は政府ベースのアンタイド方式をとり、開発途上国の社会開発に向けるべきである。（例：海外経済協力基金のタイ円借款）

第3に開発途上国の国家主権を尊重することであり、これを無視すると、再びタイの様な日貨排斥に日本は直面する事になり、この事は双方にとって経済協力の効果を縮小させてしまう。従って、先進国は援助に対して不当にナショナリズムをかき立てる事なく、単なるコンサルタントの気持で行っていく事が望ましいといった意見も出た。

第4に、日本自身、国内問題として、都市の過密化・公害・分配の不平等に改善の努力をすべきである。経済協力をを行う前にこれらの問題を再吟味する事は経済協力を効果的に行う上で必要である。例えば、日本の産業構造を軽工業、重工業の二重構造から知識集約型産業へ転換し、労働集約型産業は開発途上国に比較優位を持たせたらよいのではないか。最後に、経済協力の意義をこれらの意見を基礎にして述べてみよう。現在の世界貿易における国際分業の形態はリカード流の分業とは異なり生産要素の移動が完全でない為に狭義の国際分業と言える。これは各国には特有の culture や主権や伝統があるからである。従ってこの条件下で一国の Price stability, social environment を考えた広義の国際分

業を考えるには新しい国際貿易の秩序が必要であり、それを達成する為の時間の経過に援助がある。即ち、公正な貿易があれば、ある程度国際分業が働いて経済協力の必要性はなくなる。しかし、現実の問題として、公正な貿易には相当な時間を要するので経済協力は永遠に続くといっても過言ではないだろう。「政治・外交・協調・人道上」の理由からでは、開発途上国にある重要な課題（矛盾）→分配の不平等などを解決する援助の形態は何か。

- 1) ODA（政府開発援助）の増加
- 2) 開発途上国の社会資本の充実と社会開発の為にODA
- 3) 民間企業の良識ある行動規準に基づく投資

〔II〕アジアの平和と開発の為に日本の経済協力の態度

日本の1970年代の対外経済政策の一つとして経済協力は絶対に欠く事は出来ない。これは国際協調という立場から世界中の人々の福祉を安定させ、向上させる事を目的としているからである。他のセクションでも発表された日本とアジアの外交や文化交流を行う為には経済協力の意義を十分に我々が認識しない限りうまくいかない。経済協力の体系と現況を今さらここで述べる必要はないが、日本の援助量やその条件がどれだけ移動したかといった数字の追求を行うよりも我々日本人はもっと「足元を見よ」と言いたい。第8回東南アジア開発閣僚会議は今秋、東京で行なわれたが、日本の経済協力が内外で説得力を持つ為には日本自身の態度の変更の必要性が強調されている。従って我国は早急に産業貿易構造の転換を行う必要がある。最後に、国際協調の一形態の経済協力は世界の人々が幸福になれるのだというグローバルな気持を持たない限り、経済厚生でいう lump-sum-transfer は成立しないであろう。

（広田政一・慶応義塾大学）

D セクション



指導：米山俊直先生

— まえがき —

我々は主として日本国内の問題、とくに過疎・過密を中心に議論を展開したが、そこで得られたものは、「アジアの平和と開発」という大テーマにも充分適用しうる、意識面での覚醒であったと思われる。我々の演習は、

- 1、問題提起「近代化の過疎・過密は表裏一体か」をめぐる、「近代化」「過疎」「過密」の意義の解明。（自由ゼミ形成）
- 2、1に対する米山先生の整理（とくに「近代化」について）と、それに基づく討論。
- 3、国際的視点への発展。

の3つに大きく分けられる。紙数の制限及び他のセクションとの関連を考慮して、3の問題に重点をおきながら報告をまとめる。これによって、冒頭に述べた「意識面での覚醒」の中味が少しでも明らかになればと思う。

1、過疎・過密の意味。

過疎とは「人口減少が地域の社会的経済的機能の低下（あるいは崩壊）発展の停滞を招いた状態。（米山俊直著「過疎社会」）」と一応定義づけられる。過密が過疎の対応概念とすれば、「人口減少」の代りに「人口増加」と置き換えるだけで、過密の定義として十分なのだが、その実態は過疎ほど明確ではない。交通渋滞・住宅事情の低劣・ゴミ問題・通勤ラッシュ等の現象が指摘されたが、これらは、過疎地域での挙家離村、挙村離村を招いたほ

どの深刻さをもって意識されない。このことは、都市の便利さ、経済的豊かさを認める中で、過密が惹起した生活の質そのものの低下を見逃し、あるいは当然視する、都市人の感覚の鈍化を示唆するのかもしれない。これは同時に、過疎問題の深刻さを認める視点の欠落でもある。こうした生活のメカニズムの把握、生活の質に対する感覚の衰えこそ、過疎の持つ根源的な悪なのかもしれない。勿論、近年この点の問題意識は急速に高まってはいるが……。

2、近代合理主義あるいは経済合理主義

こうした過疎・過密は、荒っぽく言えば、資本効率上昇を至上とした高度成長政策と、それに呼応した国民の経済合理的な意識によって生み出されたといえる。本質的に資本効率上昇の限界を持つ農業は、この波に乗れず、もともとあった都市と農村の格差は一層拡がり、農村蔑視が農村自体にも広まってしまった。都市の生活様式の浸透は、消費水準の上昇 → 現金収入の必要性増大 → 兼業・出稼の増大 → 農村の崩壊という道を辿り、農村の人々の生活ばかりか意識まで都市化し、固有の農村文化は失われる。これと似た動きが、所謂先進国文化の押しつけという形で、国際的に現われていないだろうか。勿論、これは現在の格差の固有化を示唆することとは別の議論である。

これに関して、三里塚あるいは志布志の、土地を守れ！開発拒否！の抵抗が問題にされた。全体的経済合理主義と矛盾する個々人の本来的欲求に基づく抵抗は、何のための豊かさという問題の他に、民主主義の根本である個々の生活の尊重、それに対応する文化の多様性の肯定・尊重という現代的な問題意識の覚醒を導く、勿論、現実是这样したきれいごととで描けるものではないのだが……。

3、都会脱出指向に潜むもの。

吉野の春の美しさを見て、都会人は「一年こんなきれいな所に住めて幸せだね」と里の人に言った。里の人は複雑な思いでそれを聞

く。長い冬の厳しさを知らないで何を言うか———と思ひながら。

最近の都会人の田園指向は凡そこのようなものである。都会の便利さを既に得て、更に農村の一時期の快適さをも我が物にしようという一種の身勝手といえよう。農村の一年の生活に対するトータルな理解がそこにはない。我々は今回の討論で改めて、生活総体の認識の重要性を感じた。

ところでこのトータルな理解こそ、国際理解の中でも最も大切なものであろう。一面的な理解は誤解に等しいのである。

4、力と富の合理主義から、共感と倫理の合理主義へ、

上に述べた話に共通するものは、力と富———経済力力の合理主義に対する批判である。日本の都市と農村の問題を考えていくと、日本と東アジアの他の諸国との間の問題にもあてはまりそうなことがいろいろ出てきた。アジアの平和と開発を論ずる前に、日本の中でこれらの問題解決の実績を積み必要があるのではないか。

この解決の基本となる構えとして、共感と倫理に基づく合理主義を提起したい。働きかける相手の立場に立つこと———共感である。経済合理主義という力の論理に欠落したもの———倫理である。

どのような倫理か。我々の模索すべきこれからの課題である。

米田先生が提起された「都会化された日本の現在を前提にしたユートピア論」すなわち現在の日本の矛盾を他へ転嫁することなく解決する議論の展開こそ、この課題の大きな鍵であろう。

———あとがき———

冒頭に述べたように、セクションの報告としてはまとまりを欠き、また叙述もいささか個人的になったが、今後の議論の発展への資となれば幸いである。

国外生活経験者5名を含んだ12名のメンバーは、その経歴面からも、都市、農村、そし

て国際的問題に極めて豊富な話題を提供して討論に熱が加わり、大きな友好を結んで終わったことを最後につけ加えておく。

(竹内 裕・東京大学)

Eセクション



指導：杉山二郎先生

日本人の外来文化に対する受容と消化———芸術的側面を中心として———と言う表題の基に私達のEセクションでは討議が進められました。

又この討議がさらに充実したものになる様にとの配慮から、先生がわざわざいろいろのスライドを持って来てくださったので私達もそれを基にして、本当に実のある討論が出来た様に思います。しかしここでは、その経過を逐一報告するのではなく、そこから感じた感想やら、私なりの推察な意見を述べてみたいと思います。

ところで、私達のこのテーマを一見して違和感を感じずる人が多々いるのではないのでしょうか。又、これは、今回のセミナーのテーマである「アジアの平和と開発」には全く関係がないのではないかと思われる人もいるかも知れません。最も「開発」という言葉から、そこに文化問題ではなくいわゆる援助問題とか外交問題などを先づ第一に思い浮かべる人がいるのは当然な事なのかも知れません。それは、確かに、「アジアの平和と開発」のためには、外交や経済援助等が重要な問題であり、かつ必要かくべからざるものであるからに違いありません。しかしそこで課題となる

のは、いかにしたら諸外国との外交が円滑に進むのか、又経済援助問題に関して言えば、いかにしたら、今ある諸問題を解決してそれを有効的に行なえるかと言うものであって、それは、解決のための技術的問題にすぎません。たしかに技術的面を語る事も必要な事でありましょう。しかし、この様な諸問題を是正するために、その方法論のみを論じてもそれは根本的な解決とはならないのではないのでしょうか。何故なら、そこには何ら人間と言うものが考察されていないからだと思うのです。外交交渉にしろ、経済援助にしろ、それを遂行するには、必ずやそこに、人間同志の思惑の面での骨肉の絡み合いが演じられるものと思います。ではその絡み合いの中で、互いの利益という事を頭に入れた上で、外交交渉や経済援助が円滑に行なわれるためには一体どうしたらいいのでしょうか。私が思うにそれは相手を理解し、自分を理解する事ではないのでしょうか。つまり相互を理解し合う事が最も重要な事だと思うのです。その相互理解の上に立って、先述のいわゆる経済援助あるいは外交とはかくあるべきだという論を考えれば、それはもっと速やかに解決できる問題であろうと思うのです。それでは一体互いに理解するにはどうしたらいいのでしょうか。それは先づ相手を知る事でありましょう。言い換れば、相手国の文化を知る事でありましょう。と言うのは、人間の思考様式、行動様式あるいは生活様式を規定するものはいわゆる伝統、歴史、慣習であり、そしてそれらは全て文化と言うものに包含されてしまうからなのです。

相互の文化を認識し合えば、そこに、当然犯してはならないタブーと言うものを発見するに違いありません。私達は諸外国人と付き合う際、このタブーと言う問題をもっともって考慮に入れるべき必要があるのではないのでしょうか。たとへば、牛を神聖なものとして特別大切にするヒンドゥー教徒を目の前にして公然と日本人が、牛を食べたとしたらどう

なるのでしょうか。当然彼らは、日本人に対して拒絶反応を示すに違いなく、又、日本人は我々を侮辱したと言って憎悪の目で始めるに違いありません。そんな状態の中で、外交交渉等がうまくいかないのはもちろんの事で、そしてそれと関連した、経済援助等の諸問題が解決できないのは当然なことではないのでしょうか。

「己を知り敵を知らば百戦危うからず」の諺がある事からも、いかに相互を理解する事が重要であるかをご理解いただけたと思います。

いままで述べて来た事は全て常識であるといわれるかも知れません。ある意味では当たっているでしょう。しかし、それを学ぶ事を私達は何とおこたつて来た事か。タイの日本商品に対する不買運動などは、相手国の立場や相手国の身になって考えると言う事をしない日本人の一方的な外交交渉、経済援助の一つの弊害の現われではないのでしょうか。

アジアと言う地域は古代から日本とは関連の深い所で、その与えた影響も甚大で従って類似性も多方面に渡って見受けられます。だから相互に努力しさえすれば、もっともつと理解し合えるはずなのです。

おこたる者こそ破滅する。私は今回のセミナーを通してこんな事を学んだ様な気がするのですが。

(畑沢和夫・早稲田大学)

以上が各セクションからの報告である。この他に、全体討議の席上、まず留学生からは第一に、一国の文明を形成するには、物質文明ばかりでなく精神文明もそれ以上に大切である。しかし、戦後日本の現状を見ると精神文明の面では非常に欠けているものが見られる。

第二に、戦後日本はアメリカ中心の外交を進めてきたが、アジアの新しい国際関係という問題について日本が発言するには、アジアの一員としての自主独立的な日本外交を確立

することが前提条件であると考え。

第三に、日本は、アメリカなど経済的先進諸国に対しては劣等意識を、そしてアジアなど開発途上国には優越感を持つという日本人の傾向は参加した日本人学生も認めているが、このような考え方は直ぐに改める必要がある。

第四に、日本とアジア諸国との関係を考える場合。支配・被支配、あるいは植民地主義など歴史的事実の問題があるが、これは、我々若い世代ではあまり障害ではない。それは過去のことであり、問題なのは現在と未来についてである。

最後に、日本人とアジア諸国との間で、文化や技術面などで相互理解が必要であるが、この国際学生セミナーは、現実的な着実な相互理解の場である、などの意見や感想が述べられた。次いで日本人学生からは

第一に、日本の首相がアジアに「行きたくないのか、あるいは行けないのか」というのではなく、これはある意味では、関心が薄い

という日本の世論、あるいは一般市民の支持のある種の反映ではないか。

第二に、先年の日中国交回復を見ても、それは、本当の理解に基くものではなく、心情的アジア主義に端を発した行動ではなかったか。

第三に、今の政府の行なっている援助を良い方向に持っていくというのは当然としても、アジアに進出している民間資本について政府が全く干渉しないというのでは、今、アジア諸国が感じている経済的侵略という感覚はいつまでもこれらの国に残るであろう。

第四に、アジア諸国との相互連帯を基盤とした世界平和の達成のためには、例えば日本とアジア諸国との生活水準の格差などについても、単にアジア諸国の生活水準を引上げるというのではなく、日本人の豊かさの評価を変えるなど、我々の価値観を根本的に転換することが必要である。

などの考えが提示された。





感想

第3回国際学生セミナーの課題と成果

第3回国際学生セミナー運営委員長
津田塾大学教授 東 寿太郎

八王子の丘で開かれる国際学生セミナーは、はやくも三回を数えることになった。そしてそのセミナーを終って強く感じたことは、関係者の真剣な討議によってきめられた「アジアの平和と開発」という主題が意味するものがいかに大切なものであるかということであった。また、それが多くの学生諸君にとっても、簡単には克服できないけれども、セミナーを終ってみるといかに強い関心を引きつけるテーマであるかということであった。

今回のセミナーでは共通の副題として、「日本を考える」というテーマが選ばれた。そして政治、外交、経済、社会、文化に関する五つのセクションが開かれた。今回は運営委員として参加したが、第一回以来の参加学生諸君の熱心な討議と相互理解の努力は、このセミナーでもいかに発揮され、セミナーの意義がより高められたことに強い感銘をうけた。私にとって格別の感銘は、御都合で参加が遅れられた米山先生に代って、日本の都市と農村をテーマとするDセクションの演習に

二度参加したことであった。たまたまこのセクションには外国人留学生が欠いていた。しかし、学生諸君は、外国人留学生との交流には期間中のあらゆる機会を利用することができるとし、このテーマについて十分な検討をすることが長い眼でみてセミナー参加の意義を高めるものであるという共通の認識にたつて、指導者なき演習を極めて高いレベルで自治的に運営していったのであった。私は多くの諸大学のセミナーや、大学間セミナーに参加する機会を得て来たが、このセクション演習における学生諸君の熱意と比較すべき例をあげることができない。他のセクションの指導教授や運営委員諸氏も、今回の参加者の強い学問的関心と熱意を高く評価されていた。このことは国際学生セミナーが着実にそのよき伝統を形成しつつあるものと考えてよいであろう。

しかしながら、このセミナーが将来より発展していくために指摘されるべき問題はあり、企画運営にあたる人と学生諸君の課題は残さ

れた。例えば、セミナーの期間について、二泊三日というのは短かすぎるのではないかという問題があった。これはセクション演習を指導していただく先生をテーマに即してできるだけ広い範囲からお願いするためとか、参加者の都合などを考えてのことであったが、毎回二泊三日ということではなくて、テーマに応じて個別に考えるべきことであろう。さらにセクション演習のテーマが平均的テーマが多すぎるのではないか、あるいは「日本を考える」にあたって自衛隊とか公害とかもっと具体的なテーマの方がよいのではないかということがある。「アジアの平和と開発」ということは、アジアのことを考えるというだけではなく、世界の中のアジアの地位を考えることでもあって、副題の設定にももう少し幅の広さを入れていくことも必要であろう。しかし、このセミナーが開かれるのが日本であり、日本人学生と留学生という関係の中で適切な副題として、二度にわたって日本のことがとりあげられて来た。頭で知識としてアジアのことを理解していると思っても体験をして理解していなければ、真の理解にはならない。その意味ではとにかく理解の第一歩をふみ出すことが必要であり、より身近なテーマについて考えるのが双方にとって有益であると考えたわけである。セクション演習のテーマについてはいろいろと問題がある。多様な関心を持ち、それぞれ専攻分野の違う学生が、あまりにも狭い専門的課題をこなすことが可能であるか、またそれが意味をもつかどうか心配される。同時にあまりにも広ければ、時事討論になってしまつて学問的な研究のレベルをはずれてしまい、学生セミナーとしての意味が失われてしまひはしないかというジレンマがある。これも、このセミナーが試行錯誤の中からよりよい道を見つけ出していかなければならない課題である。貴重な時間をさいて行われる全体討議の運営や報告者の報告の方法、討議のあり方の問題もある。

今回は最終日の全体討議をパネル・ディスカッション方式で行ったが、私の司会のまづさもあって各パネラーの報告が持時間を大幅に超過し、フロアーの意見の交換が白熱してきたところで時間の都合によって打ちきらざるを得ないことになった。各演習における多様な討議をどのように紹介し、全体で討議するか、また演習と全体討議の比較をどのようにするのがこのセミナーにとって適切であるか、考えなければならないことは多い。このような会議技術も限られた時間でセミナーの意義を高めるためには軽視できない点であった。このような諸問題の解決については将来は、企画段階から学生諸君の参加を得て検討するということも必要であろう。

三回のセミナーを通じて運営委員諸氏の努力があつたにもかかわらず外国人留学生の参加比率が低かつたことも指摘されよう。しかし、これは企画、発表、募集の時期、方法等の技術的な問題であつて、現在の段階では本質的にはそれほど問題とする必要はないと思われる。それは学生交流は数の問題ではなく質の問題であり、熱意と努力の問題だからである。留学生の比率を高める努力はさらに進められるべきでありいろいろと考えられている。今回オーストラリアの学生の参加を得たが、これは参加国の範囲が広がって行く一つの傾向とみることができる。この問題については、第一回セミナーの参加者が、アジア学生セミナーを行つて、毎月一回二十数回の研究会をもち、「ROBA」という機関誌を発行していること、第二回の参加者が、機関紙「伝書鳩」を中心として交流を深めていることなど、国際学生セミナーは国際学生交流の根強く幅広い基礎と連帯感を作っていることを考え合わせることも必要である。

セミナーのお別れパーティで司会をつとめながら、学生諸君の交歓風景の中に相互理解の芽を見ていた私は、それがどのように発展して行くかをたのしみにしている一人である。

セミナーに参加して

京都大学助教授 米山俊直

八王子のセミナーハウスを訪れたのは、じつは二度目であった。もう五年もまえに、ここで家族社会学セミナーが開かれたことがあり、私もそれに加わっていたからである。家族研究の専門家が一堂に会したこの研究会もなかなかの盛会であった。そのとき、私は簡素な宿舎にM教授と相部屋であったが、快適に眠ったのをおぼえている。ただ、会議の最中にも、ときどき上空を飛ぶ飛行機の爆音がひどくやかましかったことが気になった。これまでの大学のワクをこえたこのような施設が、緑につつまれた環境の中にあることがたいへん印象的で、それを利用できる東京周辺の学生たちが、うらやましかった。これがはじめてこのセミナーハウスを訪れたときの私の印象であった。

こんどは、国際学生セミナーに参加して、ひさしぶりでやってきた。建物そのものはいささか古びた感じではあるが、それほど変わっているとは思われなかった。おどろいたのは、このまえはえんえんと緑がつづく多摩丘陵であった周囲が、ニュータウンに変貌しつつあることだった。それは、四方八方で進行している変化のようであった。もともと、セミナーハウスのある丘そのものは、緑につつまれてもとのままであった。昆虫採集にでもきたのか、子供たちがセミナー室のまわりの林をうろうろしていた。おそらくこの緑は、これからはかなり貴重なものになるのではないか、と思われた。飛行機の音も、こんどは心なしか少なくなっているように思えた。

さて、国際学生セミナーである。私は金曜日が三つも講義、演習のある日なので、第一日には参加できず、私の参加した〃都市と農

村〃のセッションの学生たちに、あらかじめ討論しておいてほしいテーマを伝えてもらって、実際には土曜日の午後1時半ごろにセミナーハウスに到着した。

ちょうど、ゲスト講演の丸山静雄氏が講演中で、学生たちはそれを熱心にきいていた。私はそのうしろに座って、大小の学生たちの背中をながめながら、内心、「これから24時間あまりを、このセミナーハウスで私はどんな役割を果せばいいのだろうか」と考えていた。何度も聞かれているこのセミナーについて、私はまったくの門外漢で、セッションリーダーという私の仕事が、どんなふうにやればいいものなのやら、見当がつかなかったからである。

丸山氏の講演のあと、レクリエーションの予定が中止になり、それぞれのセッションが記念写真をとったあと勉強することになっていた。天候のせいもあるけれども、学生たちはむしろ、レクリエーションよりも〃勉強〃を希望していたようであった。

遅刻する私にかわって、運営委員長の東寿太郎教授が、私のセッションの学生諸君につきあって下さった。そのあとをひきついだわけだが、セミナー室に集った学生諸君はすでにやってきた討論の結果をうまく整理してくれていて、そこから話題は展開をはじめた。いまの学生たちにとってあたりまえのことかもしれないけれども、そこには所属する大学や専門のちがいを一切に気にかけず自由に真剣に討論に参加する空気が、いつばいあらわれていた。私たちはきめられたスケジュールをすつかりはみだしてしまつて、気がついたときは午前3時を過ぎていた。議論

は白熱し、じつにたのしかった。私にとってとくに印象に残ったのは、話をするのが特定の人にすぎず、ほとんどすべての参加者が、討論にまったく自発的に加わっている、ということだった。私にたいする質問も、おなじように真剣だった。つまり参加者全員が討論している話題に強い関心をもち、議論の進行についてきている。こういうことを、これはものがたっていた。身体的には疲労したけれども、この深更におよんだ議論のあと、私の心はたいへんさわやかであった。たまたま、私のセクションには外国人学生がいなかったのも、議論のはこびがスムーズだったということもあろうが、私にもよい経験になった。

終ってからも、私の研究室を訪れてくれた学生や、よい手紙をくれた学生がいる。きくところによると、このようなセミナーを契機にして、以来ずっとまとまって活動しているグループもあるという。さもありなんと思つた。

学問といい、研究といっても、しょせんはひとりひとりの人間の自発的な身心のはたらきである。他からおしつけられたものでは、けっしてよい成果は得られない。講義のワクや専門のワクにしばられている今日の大学のシステムは、自発性をひきだす、エデュースの場としては必ずしもよくできているとはいえない。このセミナーハウスの討論の場は、なによりもそれを与えている、といつてもよ

だろう。今日の学生たちにとって、もつとも必要な、寝食をともにし、しかもその寝食をわすれて討論することのできる場が、ここにはある。これは貴重な場だと思う。

ただ、もし注文をつけるとすれば、期間が短かすぎて、スケジュールがつまりすぎている、ということがいえよう。討論のなかで、当然疑問が百出する。その解答を、事典や統計やさらには専門的な図書からさがしてきて、つぎの討論に生かしてゆく、という作業が必要なのだが、それをやるヒマがない。これは、下手をすると討論がからまわりしたり、情報が消化不良のままでおわたりしかねない。先生たちの人格にふれる点で、小数のセミナー方式はたいへんいいが、体の弱い先生には、夜を徹しての学生のタフな研究意欲にフィジカルに耐えられない場合もあろう。私も25時間あまりの生活のうち、睡眠5時間、食事30分職員のお1人から警告されていたことだが、(朝食の時間には間にあわなかった)あとの19時間あまりの大部分をムンムンする学生たちの若い研究意欲のなかですごしたことになる。「一晩だったからいいが、この調子で何日も続けば、体がもたない。」

ともあれ、このような「場」がこれからもいつそう充実し、より多くの意欲的な学生たちのために準備されることは、じつによろこばしいことだと思う。大学セミナーハウスの一層の発展を期待したい。

感想文

ーオーストラリアと日本の関係は深いー

東京大学研究生 アラン・リックス

日本の政治と日本の学生についての知識を広げようと思って第三回国際セミナーに参加することにしました。大学セミナーハウスは非常に広々とし、気楽なセミナー生活をする事が出来た。その上セミナーのプログラムがよく考え抜かれていた。ほぼ成功した会議だったと思う。

Aセクションの人数は少なかったが討論は大変活発で日本の政治研究の役に立った。特に日本の政治意識がどういうふうに変化したか世論調査が正確かどうか、東南アジアに対する日本人の態度を変化させるべきか、という問題が起って、私も下手な日本語で出来る限り論争に加わったが面白かった。

ゲスト講演者は重大な問題点について話しをした。スチュアートさんがのべた日本人が神経質すぎるという論はセミナー全体で一番注意すべきことだと思う。

結局、相互理解は単なる援助するというだけではなく国民それぞれの意見の相違を解決するという事であり重要だと考える。

全体討論はそんなに役に立たなかったと思う。なぜかと言うと討論ではなかったからだ。報告はすべきだったが時間をかけないで簡潔な方がよかったと思う。

オーストラリア人の私自身目で見ればセミナーにオーストラリアの事があまり出て来なかったので少し失望した。両国の経済関係が強くなるようだから意見交換はふやす方が良いと思う。オーストラリアの将来はアジア特に日本の将来に依存する事になったようだから日豪間の理解を深めるには大学セミナーハウスと国際学生セミナーの役割と責任が重大だと思う。

最後にセミナーは非常に楽しくて、面白い経験があったのでいろいろ感謝しています。

(Aセクション)

ー私達が問われているものー

国際基督教大学3年 山口正子

アジアにおける日本の役割とは何か、真の援助とは何か、何故二つの中国があつてはいけないのか、日本の国益とは何を意味するのか、等々、さまざまな問題が話し合われ、何一つとして答えを出すこともできず、具体的に今の自分にできることは何かもわからないまま、焦燥感に陥ったような気がします。

あのセミナー以後日々の雑事に追われ、怠

惰にふける自分ですが、とにかく知ろうとする努力だけは続けたいと思っています。

いろいろな大学の人達や国籍の違う人達も集り、その意味で意見の多様性もあり有益だと思いました。ただお互いに違う大学だという意識がある為か、そのおくを超えて、各個人として独立した立場で自由に話し合うことができたかについては多少疑問が残ります。

もっと自分の所属する立場とか、専門とかにこだわらずに話し合ってもよかったのではないかと思います。

マス、コミで報道されている昨今の東南アジアの反日感情も長い月日を経て積み重なったものであることを考える時、ゼミの時に話

し合われたテーマ「アジアの中の日本」ということは、今も私達に問われ続けているものであることを再認識する必要があるのでしょう。今の自分にできることは何かもう一度考えてみたいと思います。

(B セクション)

一 東南アジア旅行の体験をもとに

同じアジアの中に住んでいながら、アジア人同志、どの程度に、お互いのことを理解しているのであろう。私は、今春、ふとした機会により、少々の研修を重ね、東南アジア旅行を体験したが、その際、現地の人と直接接することの必要性を痛く感じさせられた。

幸いにも、留学生を混じえるという、この国際学生セミナーの開催を知り、アジアの一員として、相互理解の一助になるならば喜ばしいことであろうと考え、参加を決めたのである。

私の参加したセッションでは、「アジアに於ける日本の経済的役割」、特に、援助問題に関して、活発な討論が展開された。勿論、現状の経済協力の持つ様々の矛盾を考えるならば、果して経済協力が真に望まれているのか、真に人間の豊かさに貢献しているのか、という疑問に直面する。しかしながら、実際に協

早稲田大学 2年 藤田 公久

力が必要とされる人々の存在がある以上は、如何なる内容を持つ協力がベターなのかを模索することになろう。

それにしても、八王子での3日間は、討論に始まり、討論で終った。僕自身、経済の素人として、どの程度、討論に参加できるのかと危惧していたのであるが、様々な角度から、諸々の話を聞くことができたことを非常に喜ばしく思っている。経済協力の効果に対し、せっかちになるな、恕の精神に立ち返れ、等の基本的な事柄を、再認識しなければならない現状は、憂うべきものであろうが、そんな所を明確にすることにこそ、このセミナーの意義が見出される。今後は、各人が与えられた立場に於いて、更なる相互理解促進を図ることであろう。

(C セクション)

一 大きな問題を背負う

僕がこのセミナーに応募した動機はこうである。

近代社会というものは非常に疑問である。

一橋大学 4年 水野 直司

物質面では確かに豊かではあるけれども、その反面、人間の画一化、組織化、管理強化が進む社会。それに比べると、前近代の世界で

は、貧しいけれど、人間が人間らしく自然と一体となって生きているのではないだろうか。こう考えると、南アジアの世界が僕のあこがれの対象として浮び上ってくる。けれども僕はまだ南アジアへ行つたことがない。僕の頭にある南アジアは、甘いロマンチシズムの幻想かもしれない。では本当のところはどうなんだろう。東南アジアの学生と話をし、その手掛りを探してみよう。こんな気持ちから参加した。

外国人留学生および何らかのかたちで東南アジアにかかわつたことのある人達の話の総合すると、僕のあこがれは、どうも一面的な「片思い」であつたらしい。しかも安易なあこがれ、同情は彼らにとって害になりこそすれ決して益にはならない、とのことであつた（少しショックであつた）。

こんな誤解は一体どこから生じたのだろうか

か、と考えると、その根本原因は、「我々はアジア人だから、同じアジア人のことはヨーロッパ人よりもよく理解できる」という勝手な考えの上に、あぐらをかいてきたことにあるように思われる。

では、本当にアジアを知るためにはどうしたらよいのだろうか。一つは、「同じアジア人のことはよく理解できる」という安易な考えをきっぱり捨てること。今一つは、日本自身を知ること—日本の歴史、文化を知り、尊重しなければ、他国の文化を真に尊重する態度は生れない—である。この上にアジア研究を進めた時、ほんの少しアジアがわかるかもしれない。これがセミナーで得た結論であつた。未だ去り難いあこがれを胸に秘めながら、僕はこの大きな問題を背負うつもりである。

（Dセクション）

— 自国の理解を通感 —

早稲田大学研修生 朴 那 美

日本へきてからちょうど半年たつた。半年ちかくいてもあまり日本の学生と話し合うチャンスもなく早稲田大学の語学研修所と駒場の留学生会館を時計のふりこのように通うだけで、「これでいいのかしら」と自分にきかしていたところ外事課のすすめでそれに山代課長も一緒だということで心細くないだろうとよろこんでこのゼミに参加することにした。

テーマはアジアの平和と開発についてで政治・経済・外交・農村・文化に対してセクション別に分けられていた。私はその中で「日本での外来文化の受容と消化」というEセクションを選んだ。

昔、中東アジア、中国、韓国から入ってきた文化を日本はどのようにして自分のものにし

たかということとこの頃、白人コンプレックスという言葉が流れているようにヨーロッパ、米国などからの文化を吸収することに汲々としているかわいそうな日本の真のすがたを見たかつたからである。

総じてこれは日本語学、文学などあらゆる日本的なものを勉強するつものに私には知っておかなければならないことであつた。

「杉山先生とEセクションの学生たち」

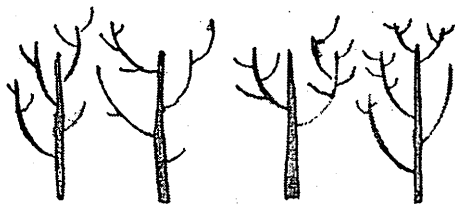
それぞれこのEセクションを選んだ学生達の理由がまちまちであり、先生の折角の愉快的講義はあつちこつちとぶため日本語が十分理解できないので神髄をとがらせてきいたはずなのにちつとも頭の中で考えがまとまらなかつた。

だがゼミの最後の日全体討議での内藤さんの

発表から//ああ、あのとき聞いた//とやっと
理解できた気がしてほっとした。
ゼミが終わってから6日目。
今まで残念に思うのは日本学生の質問に十分
答えることができなかったことである。

自分の国のことも理解できないのに日本文化
云々とするのがはずかしくなって口を閉じて
しまった自分を今だにはずかしく思いながら
この感想を書いて見た。

(Eセクション)



参加者のアンケートより

セミナー第2日目の夜、次のようなアンケート用紙を全員に配布し、翌日（最終日）の全体討議終了後に回収した。

第3回国際学生セミナー・アンケート

セクション	男 女	日本人学生 留 学 生	大学 学 科	学部 学 年
-------	-----	----------------	-----------	-----------

I あなたはこのセミナーにどんな期待をもって来ましたか。また、その期待は満足されましたか。
次の全項目について、記入例（ ○ ）にしたがってマークしてください。

項 目	参加する前の期待の度合			参加してみても満足した度合			
	非常に期待した	普通	あまり期待しなかった	非常に満足した	かなり満足した	普通	あまり満足していない
A このセミナーの主題について認識を深める	-----			-----			
B 新しい問題意識を把握する	-----			-----			
C 自分自身の問題の解決、または、その糸口を見出す	-----			-----			
D 各国、他大学の学生との相互理解を深める	-----			-----			
E 共同生活を体験する（国際的生活も含む）	-----			-----			

II あなたは、セミナーの研究、討議がうまくいったと思いますか。

次の全項目について、記入例（|-----|）にしたがってマークしてください。

項 目	非常に良 かった	かなり良 かった	普通	あまり良 くなかった	理 由
A セクション演習					
B ゲスト講 演					
C 全 体 討 議					

III あなたは、このような国際学生セミナーを今後も続けたほうがよいと思いますか。もし続けるとすれば、どのようなテーマを希望しますか。

IV あなたは今回のセミナーをどうして知りましたか。

A 友人 B 先生 C 学内の掲示 D 当ハウスからの案内 E その他（ ）

V このセミナーの 期、期間、経費（10月12～14日、2泊3日、2,000円）についてどう思いますか

時期	適当である 早い 遅い	適当と考える時期を具体的に書いてください (月 日)
期間	適当である 長い 短い	適当と考える期間を具体的に書いてください (月 日)
経費	適当である 高い 安い	適当と考える経費を具体的に書いてください (月 日)

VI セミナーハウスでの生活（宿舎、食事、入浴、起床、消灯、その他）についてお聞かせください

VII あなたは大学のゼミナールで当ハウスを利用したことがありますか ある（回） ない

VIII その他、ご意見、ご感想など（特に全体のプログラムについてご意見があれば書いてください）

ご協力ありがとうございました

S. 48. 10. 14

アンケートは必ず提出するようにと注意したこともあつてか、セミナー終了後に郵送されたものも含めて、回収率は97%に達した。

セミナー参加者数 74名 日本人学生61名 留学生13名

アンケート回答者数 70名 " 60名 " 10名

アンケートの結果を項目別に要約すると以下のとおりである。

参加する前の期待の度合

項 目	非常に期待した			普 通			あまり期待しなかった		
	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計
A このセミナーの主題についての認識を深める	26	4	30	32	5	37	2	1	3
B 新しい問題意識を把握	29	2	31	25	7	32	6	1	7
C 自分自身の問題の解決またはその糸口を見出す	20	1	21	28	7	35	12	2	4
D 各国、他大学の学生との相互理解を深める	26	2	28	30	7	37	4	1	5
E 共同生活を体験する	16	2	18	33	7	40	11	1	12

記入例が示してあるにもかかわらず、中間に○印をつけたものが数枚あったが、これは、どちらか少しでもかたよっている方に訂正して集計した(満足度についても同様)。全般的に見て、どの項目も、「普通」の数が最大で、わずかにBの新しい問題意識を把握することにおいて、日本人学生のほぼ半数のものが非常に期待していたことがわかる。また、日本人学生にくらべて、このセミナーに対する留学生の期待度はかなり低いように思われる。留学生の参加者数の少ないことと、この期待度の低さとは、ある意味では関係があるかもしれない。「E 共同生活を体験する」という点において、日本人学生の期待度が低いことは、生活を共にすることの意味についてあまり考慮がはらわれていず、よい意味での社交性の欠如を示しているのではないだろうか。「C 自分自身の問題の解決、またはその糸口を見出す」ということへの期待がA、B項目に比較して少ないこともあいまって、日本人学生は、セミナーで「学ぶ」ことにウェイトをおいている傾向がうかがわれる。全項目について非常に期待していた学生が2名あったが、大部分は2、3の項目について非常に期待していた。逆に、あまり期待しなかった方では4項目に○印をつけた留学生が1人、3項目に○印をつけた日本人学生が1人あった位で、40名の学生は、全項目にわたって普通またはそれ以上の期待を持って、セミナーに参加している。

厳密に言えば、セミナー終了の時点で、セミナーに参加する前の期待度を問うことは、セミナー参加の経験が影響することを考えると、いく分正確性を欠くことになる。今後は、参加申込み時あるいはセミナー開始時に、期待度を調査する方が意味があると思われる。

さて、各人の期待はどの程度満足されたであろうか。個人別にみると非常なばらつきがあり、全般に期待したほどに満足しなかった者、ある項目は非常に期待はずれでも、ある項目は期待を上まわったという者、また全般的に期待以上のまざまざの満足が得られた者など、種々様々である。全体をまとめた表を見ると、留学生の場合全項目について期待よりも満足度が高くなっている。日本人の場合も期待はずれは少なく、A Bなどの項目では期待よりも満足度が大ばに上まわっている。「非常に満足した」という項目に限って見た場合、全項目に○印をつけたもの1名、4項目に○印をつけた者1名、2ヶ以上の○印をつけた者14名となっている。全項目普通およびそれ以上の満足を得た者は46名、66%である。

参加してみての満足の度合

項 目	非常に満足した		かなり満足した		普 通			あまり満足して			無 回 答	
	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計
A このセミナーの主題についての認識を深める	8	3	11	34	5	39	15	2	17	3	0	3
B 新しい問題意識を把握	15	2	17	23	3	26	21	3	24	2	0	2
C 自分自身の問題の解決またはその糸口を見出す	4	0	4	11	4	15	33	3	36	10	1	11
D 各国、他大学の学生との相互理解を深める	7	2	9	15	3	18	32	5	37	5	0	5
E 共同生活を体験する	10	1	11	14	5	19	27	4	31	8	0	8

この満足度が、次の質問の満足度と関係があるかといえば、ほとんど相関は見られない。ただ、ABC3項目全部非常によかったとした人が3名あったが、そのうちの2名は質問Iで、「非常に満足した」に4項目以上○をした人であった。

セミナーの内容についての評価

項 目	非常に良かった		かなり良かった		普 通			あまり良くなかった			無回答	
	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計
A セクション演習	16	1	17	33	5	38	10	3	13	1	1	2
B ゲスト講演	13	2	15	24	7	31	14	1	15	5	0	5
C 全体討議	7	4	11	12	2	14	26	2	28	10	2	12

セクション演習は「よかった」とする者が多かった。理由は、各セクションとも、かなり活潑な討議が行われ、問題が深められ、いろいろな人の意見を聞くことができたからである。あまりよくないと答えた者2名はCセクションであるが、これは22名というセクションの人数の多さが原因であろう。しかしCセクションでは非常によかったとする者の数も7名あり、人数の多さにもかかわらず、充実した討議が行われた模様である。留学生の方がAに関してやや評価が低いのは、言葉の問題があるのではないだろうか。わかりやすい言葉で、明快な意見を述べるよりも、むづかしい言葉で、議論のための議論をするという場面がなかったかどうか、日本人学生は反省する必要があるだろう。

ゲスト講演については、当然のことながら積極的な評価が多かった。質疑応答の時間がもう少しほしいとか、講演をセミナーの前半で聞いて、討議にそれを活かしたいという声もあった。全体討議を、先生方の全体に対するお話と感じがよかった回答が2、3あったが、それは別としてこれがあまり評価されなかったのは、時間の不足と、セクションの代表者達が、あるものはセクションの報告をし、ある者は自分の意見を述べるという不統一があったことであろう。これは、事前の打ちあわせの不徹底さによることも大なので、運営委員として大いに反省している。しかし、取りあげられた問題は大変興味があったと述べている者がかなりあることから見て、うまくすすめれば、この全体討議がセミナーのハイライトともなり得ると考えられる。次回セミナーではこの点よく注意したい。

今後もこのような国際セミナーをつづけた方がよいとする者は51名（残り19名は無回答）で、今回と同じようなテーマでよいとする者を始め、次のようなテーマがあげられていた。経済問題。外交問題。国民性、意識、価値観等。文化の諸問題。日本に関する諸問題。人類の未

来(資源、人口問題等も含む)など。

以上は国際学生セミナー自体の内容に関するアンケート回答をまとめたものであるが、今後も継続して行われるであろうセミナーに役立たせるために、開催時期、期間、経費あるいはセミナーハウスでの生活等について問うてみた。

時期、経費については殆んどの者が適当であると答えている。期間について適当と答えた者が半数近くあったが、ほかに2泊3日では短か過ぎるとした者がかなりあった。初日は相互に知り合うことに費され、残りの日数ではセミナーの実質的討議が満たされない。学生が熱心な余り話し合いが深夜に及んでは、実際のところ学生もひっぱり出される先生方もたまったものではないであろう。せめて3泊4日は必要と答えたものが多い。なかにはそれ以上の期間が与えられなければ真のセミナーの効果は得られないという意見もあった。

セミナーハウスでの生活は、よい環境のなかで楽しい生活ができて、大概満足すべきものであったとしているが、例年のことながら食事と起床、入浴時間の点でもう少し配慮して欲しいというのが見受けられた。限られた予算のなかで考えねばならないことと、参加学生の個人差にもよることなので、いちがいにはいえないと思うが、朝食の内容と量について注文がでていた。起床時間が早すぎるとか、プログラム進行の時間が守られないとか、入浴時間の延長とかの問題は、集団生活とつまった日程のなかで各自の工夫と自覚が必要だと反省させられた。前日の疲れが翌日に持ち越されないよう注意が肝要である。

以上のほかに主として運営上の問題として次のような意見が述べられていた。1) セクション相互間の交流がなくて、他のセクションの人との対話の機会が少い。2) 過去に国際学生セミナーに参加した人、日頃からこのセミナーのテーマに関心を寄せていた人、初めて問題に関心をもった人等ヴァリエティに富んだ参加者が共通した問題意識をもてるようなプログラム編成の工夫ができれば、このセミナーが更に盛り上るのではないか。3) 全体討議は各報告者の報告に時間を取り過ぎて、フロアとの討議が充分でなかった。事前の打合せをもっとやる必要がある。4) 国際セミナーなので使用語に日本語のほかに英語を加えるような配慮ができないか。5) 留学生の数が少なすぎる。日本人学生とのバランスを考えよ。6) 留学生からの意見で、東南アジアの学識経験者をゲスト講演者に迎え、あるいはセクションリーダーにおいてはどうか。7) 前回あった工場見学を希望することなど非常に有益な意見が寄せられて参考にしたいと考えている。

全体としては、この種のセミナーの意義を認めて、この後も大いに継続開催して欲しいというものが大勢をしめていたことを最後に附記する。

山代昌希・江尻美穂子
運営委員・宮川清・布施満雄

第3回国際学生セミナー・日程表

期 日 昭和48年10月12, 13, 14日

主 題 「アジアの平和と開発」

—日本を考える—

第1日—12日(金)	18:00~19:00 夕食
16:30~17:30 受付開始	19:00~20:00 共通セッションⅡ (講堂)
17:30~18:00 オリエンテーション (講堂)	20:00~22:00 セクション演習Ⅲ(セミナー室)
18:00~19:00 夕食 (食堂)	22:00~23:00 入浴、就床。指導教授打合せ (松下サロン)
19:00~20:00 共通セッションⅠ (講堂)	
20:00~22:00 セクション演習Ⅰ(セミナー室)	第3日—14日(日)
22:00~23:00 入浴、就床。指導教授打合せ (松下サロン)	7:00~ 8:00 起床、宿舎内外の清掃、散歩等
	8:00~ 9:00 朝食。学生委員連絡会(散歩道を一周して、ブリッジより食堂へ入る)
第2日—13日(土)	9:00~11:00 全体討議 (講堂)
7:00~ 8:00 起床、宿舎内外の清掃、散歩等	11:00~12:30 ゲスト講演: ジェイムス・L・スチュアート先生 (講堂)
8:00~ 9:00 朝食。学生委員連絡会(散歩道を一周して、ブリッジより食堂へ入る)	12:30~14:00 送別昼食会(食堂) 解散
9:00~12:00 セクション演習Ⅱ(セミナー室)	
12:00~13:00 昼食	
13:00~15:00 ゲスト講演:丸山静雄先生	
15:00~15:30 お茶 (講堂) (講堂) 記念写真撮影(ようこそ広場)	
15:30~18:00 自由時間:レクリエーション	

指導教授・運営委員名簿 (順不同、* 印は運営委員)



渡 辺 昭 夫	明治大学助教授
中 嶋 嶺 雄	東京外国語大学助教授
広 野 良 吉	成蹊大学教授
米 山 俊 直	京都大学助教授
杉 山 二 郎	東京国立博物館 東洋考古室長
東 寿 太 郎 *	津田塾大学教授
山 代 昌 希 *	早稲田大学外事課長
宮 川 清 *	東京大学学生課長補佐
江 尻 美穂子 *	津田塾大学講師
布 施 瀧 雄 *	早稲田奉仕園総主事

— 第3回国際学生セミナー参加状況 —

大学別参加者数

大 学 名	日本人		留学生		計	大 学 名	日本人		留学生		計
	男	女	男	女			男	女	男	女	
東京外国語	6	2	1		9	東京女子		1			1
東 京	3		3		6	日本女子		1			1
一 橋	1			1	2	立 教	1				1
東京医科歯科	1				1	大妻女子		1			1
東京教育	1				1						
京 都			1		1	(小計)	30	17	6	1	54
そ の 他											
(小計)	12	2	5	1	20	合 計	42	19	11	2	74

学年別参加者数											
学 年	日本人		留学生		計	学 年	日本人		留学生		計
	男	女	男	女			男	女	男	女	
早 稲 田	9		2	1	12	1 年	2	2			4
上 智	5	4	1		10	2 年	7	2	1		10
慶 応	7		1		8	3 年	13	7	2		22
育 山 学 院	1	3			4	4 年	17	7			24
I C U		2	2		4	大 学 院	3	1	4		8
明 治 学 院	2	1			3	そ の 他			4	2	6
成 蹊		2			2	合 計	42	19	11	2	74
独 協	2				2						
東 洋		2			2						
専 修	1				1						
中 央	1				1						
東 京 経 済	1				1						

国籍別参加数

国 籍	男	女	計
日 本	42	19	61
オーストラリア	3	1	4
韓 国	2	1	3
アフガニスタン	1		1
ク メ ー ル	1		1
中 国	1		1
フィリピン	1		1
マレーシア	1		1
南アフリカ共和国	1		1
計 9 カ 国	53	21	74

THE 3rd INTERNATIONAL STUDENT SEMINAR

sponsored by Inter-University Seminar House, Inc.

Time: October 12-14, 1973
Place: Inter-University Seminar House, Hachioji, Tokyo
Participants: 60 college, university or graduate school students

— Peace And Development In Asia —

GIVING A THOUGHT TO JAPAN

As China has practically returned to international society and the Vietnam War is expected to restore peace, Asia is taking the next step toward an era of solid peace and well-balanced development. Japan, as an Asian nation, is expected to do much towards Asian's political, economic and cultural development. Does Japan have sufficient ability and will power to take a part of this contribution? Japan has been modeled upon political and economic systems of the West in its modernization processes, and has made every effort to adopt Western culture and civilization.

With the motto "Catch up with the West and outdo it!", Japan has taken as its first goal to adapt itself to the societies of Western advanced nations. However, a Western culture and civilization has not been quite realized due to the peculiar social structure developed in the course of its history. Consequently its culture has resulted only in retarding the real internationalization of Japan. Moreover, having been busy building up political and cultural settings according to a Western style, Japan, though it is situated in Asia, has not been able to add much to Asian peace and development. Asia, in its new circumstances, needs political, economic assistance, mutual cooperation and positive cultural exchange. If Japan is to play some important role in achieving these objectives, there is a strong requirement for it to reconsider its whole attitude of the past.

In our International Student Seminar so far, Japanese and foreign participants have produced a number of works worth mentioning on the subject of Peace and Development in Asia, with keen academic concern and through earnest discussion. It is highly desired, this time again, that deep mutual understanding will be arrived at during our collective life of three days through academic and human communication.

GUEST SPEAKERS "Regionalism in Asia" MARUYAMA Shizuo
Editorial Writer, Asahi Shimbun
"Japanese Capabilities in Asia" James L. STEWART
Liaison Representative, The Asia Foundation

SECTION EXERCISE

A—Political Section: "Japanese Politics Today and Public Opinion"

.....WATANABE Akio, Meiji University, Tokyo

Rapid changes in the international environment for the past several years have resulted in a remarkable increase in Japan's importance in world politics. It is now almost impossible to talk of the future of the world and in particular that of Asia without making a serious attempt of analyzing Japanese politics. Her political future will be determined by a variety of complicated factors, one of the most important among them being trends in Japanese public opinion. The exercise in this section is designed to discuss various problems of today's Japanese politics from this particular point of view. In addition to the specified textbook, those who are not very familiar with the Japanese political system may find Frank Langdon's *Politics In Japan* (The Little, Brown Series in Comparative Politics, 1967) useful.

B—International Relations Section: "New International Relations in Asia and Japan's Diplomacy"

.....NAKAJIMA Mineo, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo

Since the drastic changes in international relations caused by the US-Chinese rapprochement, the realization of Peking's seat in the United Nations, the restoration of Chinese-Japanese relations, and the cease-fire in Vietnam, what kinds of unresolved issues and problems are there in Asia? How are changes in China's internal politics and external policies and the Sino-Soviet confrontation reflected in the new situation of Asia? Looking the various regional characteristics of Asia, we have to consider the role of Japan and her new diplomatic goals in the present multipolarized world.

C—Economic Section: "Japan in a Changing Asia and World in the 70s—Her Economic Role"

.....HIRONO Ryokichi, Seikei University, Tokyo

In order to promote economic growth, and expand exports and maintain full employment as well, Japan has utilized for over a quarter-century all physical, technological and manpower resources and as well as social institutions not only of her own country but also those of other lands in Asia, North America and the world. Whether she likes or not, Japan has now become the world's third largest economic power in terms of GNP size. In the 70's and 80's she will no longer be allowed to have the luxury of remaining on the international scene as passive and as low-gear as she has been over the last two decades or so. Japan is now increasingly expected to play a more positive role commensurate with the economic power she has already realized and with her potential, in order to provide a secure peace and more rapid development in Asia and the entire world. The big question before us is this: will Japan really respond to this historic call?

D—Social Section: "The Rural-Urban Dichotomy in Japan"

.....YONEYAMA Toshinao, Kyoto University, Kyoto

A key to understanding Japanese society which is moving toward the "post-industrial age" is the interpretation of the migration of people from the countryside to urban centers. We will deal with the interrelations between cities and the countryside represented by overcrowded urban centers and empty rural communities. We will try to compare similar trends in other parts of the world and to bring in issues of North-South relations and of resources. It is hoped that this section will create a basis toward understanding Japan in order for us to think about peace and development in Asia.

E—Cultural Section: "The Acceptance and Assimilation of Foreign Cultures by the Japanese—From the Point of View of Fine Arts"

.....SUGIYAMA Jiro, Department of Oriental Art and Archaeology, Tokyo National Museum

The Japanese islands are located to the easternmost part of the Eurasian Continent, and are surrounded by the ocean. We Japanese have always been influenced by such geographical and climatic features through foreign peoples coming from the West. Because Japanese culture and civilization is an assimilation of Chinese, Indian, West-Asian, and European elements, if we want to understand the essence of Japanese culture, we must study and investigate contacts between Japanese and foreign peoples. Color slides of Fine-Arts items illustrating this theme will also be used.

SEMINAR LEADERS

HIGASHI Jutarō, Tsuda College (Seminar Director)
YAMASHIRO Masaki, International Liaison Office, Waseda University
MIYAGAWA Kiyoshi, Student Affairs Office, Tokyo University
EJIRI Mihoko, Tsuda College
HIRAKI Noriko, Rikkyo University
FUSE Namio, Waseda Hoshien

第3回国際学生セミナー報告書

発行日 昭和49年1月31日

編集発行 財団法人 大学セミナー・ハウス

東京都八王子市下柚木1-987

(〒192-03)

電話(0426)76-8511

印刷 有限会社 三 青 社

東京都中央区銀座1-5-12(〒104)

電話(03)561-5218



昭和49年 1 月